









にはいせん」と言われるよりも、「ここにいますよ、聞いていますよ」という感覚の方が、日本人のメンタリティーには合っているのかもしれないね。

奈良住職…おっしゃる通りです。神道でも、魂は天に行くけれど、家にも宿り、お墓にも宿ると考えます。多重的な所在を認めるのが日本人の死生観です。「草葉の陰から見ている」という感覚が、道徳や安心感の基盤になっている。だからこそ、私は「位牌は亡くなった人と語り合うためのものだから、兄弟それぞれが作ってもいいし、もっと大切にすべきだ」と伝えています。ひとりの人をバラバラにするわけではなく、それぞれの場所での対話ができればいいのです。

効率化社会が生む  
供養の変質 送骨問題と  
ビジネス化の影

中村住職…しかし、現代はそのつながりが希薄になっています。最近危惧しているのが、「送骨」や安易な永代供養のビジネス化です。ある寺院が「数万円で遺骨を郵送すれば永代供養する」というサービスを始め、メディアでも取り上げられました。これには大きな問題があります。故人や家族、親族との関係を正確に把握しているのでしょうか。これは「送骨」ではなく「捨骨」ではないかという指摘もありました。そもそも、お葬式や供養ということとは

単に遺骨を処理する事ではありません。『家族葬』という謳い文句が独り歩きしている昨今ですが、家族が思っていた以上に参列者が集まり、感謝されたり、社会に貢献していたことを知らされたりするケースがあります。お葬式には、そうした故人の多面的な人格を家族が再確認し、地域や血縁の絆を結び直す機能があるんです。それをコストや効率だけで切り捨ててはいけません。

藤木…今の時代は、文明の発展やライフスタイルの変化もあり、効率化の波は避けられませんが、それによって失われる「縁」の機能を見過ごしてはいけませんね。

奈良住職…現代社会は情報過多で、ネットで何でも調べられますが、逆に物事を深く考え、自分の中で熟成させる時間が失われているように感じます。私の父、康明や佐々木宏幹先生ともよく話しましたが、文化や人格というのは、時間をかけて醸成されるものです。「当たり前」のことを当たり前にする、という禅の言葉がありますが、その意味が本当に腑に落ちるには、何十年という時間がかかる。今の社会は、その「待」時間を許さなくなっています。デジタル時計は「今この瞬間」しか表示しませんが、アナログ時計は「全体の中の現在地」が見えます。現代人はデジタルな思考に偏りすぎて、全体性を見失っているのではないのでしょうか。

さまざまな歴史の  
証人としてタイムカプセルで  
あるべき寺

中村住職…全く同感です。お寺には、長い時間を経きたものが沢山あります。7年前、お寺の整理をしていたら、戦時中の本や新聞が出てきました。中にはナチスを礼賛するような本もありましたし、山本五十六元帥が亡くなられた時の新聞もありました。これは「負の遺産」として隠すべきものではなく、当時の人々がどう生きていたかを伝える貴重な証拠です。お寺は「タイムカプセル」なんです。過去から現在、そして未来へと続く時間の流れの中に私たちがいることを再確認する場所。だからこそ、簡単に捨てたり効率化したりしてはいけない部分があるのだと思います。

藤木…社会問題といえば、お2人は人権や教育についても独自の視点をお持ちですね。

中村住職…40年前にシベリア抑留を経験した檀家さんが「共產主義は倒れるよ」と言っていたのが忘れられません。「人間は働いた分だけ報われないと頑張らない。国営農場のトマトは小さいが、自分の庭のトマトは大きいんだ」と人間の「欲」や本質を無視したイデオロギーは長続きしないということを、その方の実感から学びました。

奈良住職…「人権は平等だ」と

いう概念も、元々はプロテスタントイズムの「神の前では人間は皆等しく無力(罪人)」という発想から来ています。その宗教的背景を抜きにして、表面的な平等だけを叫んでも根付きません。日本には日本の「命の平等」の感覚がある。虫や動物、草木にも命があるという感覚です。そこから現代に合った人権感覚を再構築すべきでしょう。今の教育は、そうした根本的な哲学や論理学を教えず、小手先の知識ばかり詰め込んでいる。これでは情報に流されるばかりで、自分の軸を持つことができません。

中村住職…同感です。最近「戦死病没者」を「英霊」とは呼ばないとか、言葉狩りのようなこともあります。国家のために命を落とした人を尊ぶのはどの国でも同じです。歴史修正主義と言われるかもしれませんが、一方的なイデオロギーで過去を裁くのはおかしな話です。

奈良住職…天皇制の議論もそうですね。男系維持か女系容認かという議論があります。が、歴史的に見れば男系で継承してきたからこそ相継ぎいが最小限で済み、世界でも類を見ない長い王朝が続いている。エチオピアと日本くらいです、7世紀から国名が変わっていないのは。そうした歴史の重みを無視して、現代の「男女平等」という物差しだけで皇室典範を変えようとするのは拙速すぎると感じます。日

本の根本的な国体やあり方を、もっと時間をかけて議論し、熟成させていく必要があります。

寺の役割は供養と活動を  
通して人と人の関係を  
熟成させる手伝い

藤木…最後に、これからの宗門やお寺のあり方について、どうお考えですか？

奈良住職…特効薬はありません。毎日毎日、当たり前の供養や活動を積み重ねていくことしかありません。そして、お寺にあるもの、地域の歴史、人材を最大限に活用して、人々が集い、語り合い、時間をかけて関係を「熟成」させていく場を作ること。先ほど話題に出たネット配信なども手段としては有効ですがそれはあくまで

をありがとっございました。



写真提供 永平寺

その時、仏教徒に  
何ができたのか

春が近づくと、東日本大震災と東京電力・福島第一原子力発電所事故当時の状況を、昨日のことのように思い出す。

地震の被害は震度6を越えるとき大きなものとなる。震災発災から15周年となるが、その間4〜5回の震度6を体験すると、地域の人々は「次の震度6はいつであろうか」と常に心の中で身構えている。

1000年に1度のレベルだったということは理解できても、5分間ほどの揺れで家が割れ、家が倒れ、大津波で2万人の方々の命が消えてしまったことに驚き以外なかった。またさらに現代の叡智の結晶といわれた(そのように教え込まれ信じていた)原子力発電所が事故を起こすなどというのは、夢想だに

なかった。あれから15年である。仏教の根本は何かと問われれば、「智慧の獲得と慈悲の実践」ということであろう。幸いにも仏教に巡り合えたものは、生涯の生き方の発電機であり発動機になる。智慧は生命の在り方を理解し自己を究明する洞察力であり、慈悲は自己も他己(他人の自己)もかけがえない尊いひとつきのものだから他を害することなく悦びと生きる力を与えることだろう。特に慈悲は「(悲)しみ苦しみの呻きを(慈)ともにする」ということだろう。もちろん智慧と慈悲は上下も左右もなく

円環している。東日本大震災は悲惨でまさに地獄のような状況であったが、「人の世は素晴らしい。人間の繋がりは有難い」と思えることもあった。

発災と同時に、被災地も含めて寺院や僧侶たちも直ちに避難所の受け入れ、また津波被害地には近隣はもちろん内陸部の広範囲の地域の僧侶たちが読経供養のボランティアとして読経供養を行った。メール、ラインを駆使し、全国から迅速な対応があった。何よりそれが当たり前として動いてくれる姿に感謝してもしきれないものがあ

未曾有の災害で  
真価を問われる仏教の力

そして若い彼らがとても頼もしく思えた。

九州の青年僧侶からメールが届いた。

「食料を積んで東北に向かいます。準備不足ですが、集めた食量を積んで行ける者からトラックで出発します」という東北から最も遠い彼らの言葉が、心を充電してくれているように感じた。その後、各地の青年僧が連携結集し被災地に入っていた。当時福岡は、原発事故の影響で立入れなくなっていた。多くが津波により甚大な被害を受けた宮城県と岩手県へ支援に入

た。青年僧たちの力にどれほど助けられ応援してもらっただろうか、はかり知れない。

全国に散っていた  
僧侶たちが北を指す

また発災後余震に悩まされていた5月ごろ、九州の青年僧から電話があった。それはこういう話であった。取るものもとりあえず、食料をかき集めてトラックに積み込み、参加できる30代の青年僧たちを中心に九州各地から出発し東北を指した。仮眠と運転手の交代を

繰り返し、3日かけて宮城県と岩手県の県境の海岸まで到着した。海岸線を見るとリアス式海岸の様子に絶句した。津波の到達線の上下では全く違っていた。津波到達線の下は、土がむき出しとなり瓦礫と土砂の土色の世界となり、到達線の上は家も道路もそのまま残っていた。あまりのことに呆然としていたが、気を取り直して無事に見える集落あたりを目指し進んでいった。

助けられた側も  
助けた側も枯れぬ涙

青年僧たちは食料を配ろうとしたが、その人々の真ん中あたりに幼稚園保育園の年長さんぐらいの女の子がいるのに気付いた。アニメのキャラクターのジャンパーを着ているが、顔もジャン

入り口です。最終的には、膝を突き合わせて、同じ空間で時間を共有することに勝るものはありません。

中村住職…住職ひとりですることは限られています。仲間や檀家さん、地域の才能ある人たちの力を借りれば、お寺はもっと面白い場所になります。「お寺は日本の伝統文化の総合体である」。この認識を持って、過去と未来、生者と死者をつなぐ結節点としての役割を果たしていくことが、これからの「生活仏教」の具体的な姿なのだと思います。

藤木…お寺が単なる儀式の場ではなく、地域のセーフティーネットであり、文化の継承装置であり、心の安定装置であることがよく分かりました。本日は長時間にわたり、示唆に富むお話をありがとっございました。

「みんなにグミを配ってくれてありがとう。もう大丈夫。今度はおあなたが食べて」

彼女はみんなに抱きしめられて照れくさそうだったが、初めてグミを一粒口に入れゆっくり噛んでニコッと笑い「おいしい」といった。青年僧たちはもう1度彼女を抱きしめた。その話をしてくれた彼も、聞く私も涙が止まらなかった。人間はギリギリになると自分の事しか考えられなくなる。空腹と疲労が重なる。他人の事など考えられない。彼女の行為は、ギリギリの中で人々の心に仏の光を灯した。津波被害の中で共に過ごした大人たちにも、また支援にかけつけた青年僧たちにも。

電話口で彼は「私たちは支援に行っと思ったのですが、あの津波被害の海岸で小さな女の子の菩薩壇にお会いし、導かれました」と言っていた。子ども

の純真さに、祖父母が、父母がいつも仏壇の前で「美味いものはお供えしてみんなで分けようね。分けるのもっと美味くなるよ」と教えていたの







編集後記

藤木隆宣

去る1月21日に奈良地裁が山上被告に対して下した判決は、その生い立ちなどの影響が考慮されなかったと感じる判決であった。当然、控訴して上級の判断も仰ぐべきと考える。ではこの事件について、私たち宗教者は今後どのように対処すべきであろうか。過去を振り返ればオウム真理教事件では、仏教界からの発言が目立たなくとも、の言わぬ団体とみなされてしまった。

2005年に発行した「曹洞禅グラフ」のお盆号に掲載した佐々木宏幹先生と河合隼雄文化庁長官の対談記事に、大きなヒントがあると感じたのでご紹介したい。

同じことを繰り返し返さぬ意味でも今回の事件に対して、私たち宗教者に何ができるかを検討してみる必要があるのではないかと。やらなければ、今年十二月にちょうどお会いする

機会がありまして、こういうお話をお聞きしました。ご自分のうちの近くにかなり古いクスノキがあるそうです。毎朝起き抜けに、そのクスノキの前行って、大きく空気を吸いながら、円相を画いて、「クスノキの神様、南無クスノキの神様、きょうも一日よろしく」というようなあいさつをして、それから一日を始めるそうです。それでわたしは「先生の宗教哲学とアミズムがそこで合体しましたね」と言ったら、「それ、それが大事ですよ」とおっしゃった。

河合 上田先生はご自分の著書をドイツ語に訳して外国に出したりされるので、概念とか抽象度というのは高くしておられますけれども、その背後の体験はすごいものです。わたしもいろいろ教えられました。上田先生に会うまでは、禅と

かし、それを学問として習い出してそっちに入り込んでいったら、現実の生活感覚のほうから、抜けていくわけですね。自分が生きている、生活しているということと、高度な仏教学はどこでつながるのかということをお坊さんたちには努力して説明してもらわないといかんですね。

佐々木 民衆がお寺にくるのは塔婆を書いてもらって先祖の墓を拝むためにくるのに、お坊さんは縁起だとか空だとか、高度な仏教哲学を教えようとする。それでは民衆と遊離してしまう。かといって、民俗宗教、精霊信仰だけを強調してお寺を運営すると、いわゆる知識人たちから、仏教はそんなものではない、今のお坊さんはだめだと非難される。そうすると、その複合がとても大事になる。

河合 それがいい加減なことを言っているのではないかと疑っていたのですが、先生を見ていたら、やっぱり禅というのは本物だと分かる。先生の生き方にそれがちゃんと出ているんですね。佐々木 上田先生はスピリチュアリティ（霊性）といっても、極めて抽象度が高いものと民衆レベルというか民俗的なものとを重層化して押さえておられますね。やっぱり、これからの坊さんとか宗教家はそういう姿勢を持たないと駄目だなと思います。

河合 それが、これからの坊さんの難しいところじゃないでしょうか。仏教学というのは、すごい歴史があるでしょう。わたしは、華嚴経の縁起の思想なんてすごいと思いますよ。し

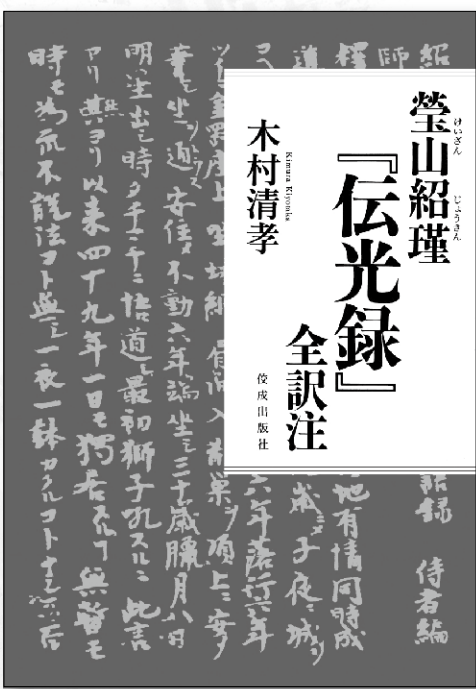
新刊

ご遷化から七百年を迎えた太祖・瑩山禪師による連続講義の記録『伝光録』。『正法眼蔵』とともに二大宗教とされながら、読解が難しく解説本も少なかった『伝光録』を、正確かつ流麗な現代語訳と訳注で通読できる待望の一冊。

けいざん じょうきん  
瑩山紹瑾  
『伝光録』全訳注

◎A5判／576頁 ◎定価4620円(税込)

曹洞宗龍宝寺東堂 木村清孝・著  
東京大学名誉教授



『正法眼蔵』全巻解説  
◎A5判／568頁 ◎定価4180円(税込)

『永平広録』  
◎A5判／384頁 ◎定価4180円(税込)

『上堂語・小参全訳注(上)(下)』  
◎A5判／376頁 ◎定価4180円(税込)

佼成出版社

〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1 TEL.03-5385-2323 FAX.03-5385-2334  
https://books.kosei-shuppan.co.jp/